

平成 12 年度の漁況

安木茂・道根淳

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図 1 に 1964 年（昭和 38 年）以降の浜田港のまき網漁業における主要 5 魚種の漁獲量の経年変化を示す。2000 年（平成 12 年）の漁獲量は 11,429 トンで、過去 37 年間で最低となった。浮魚類の漁獲

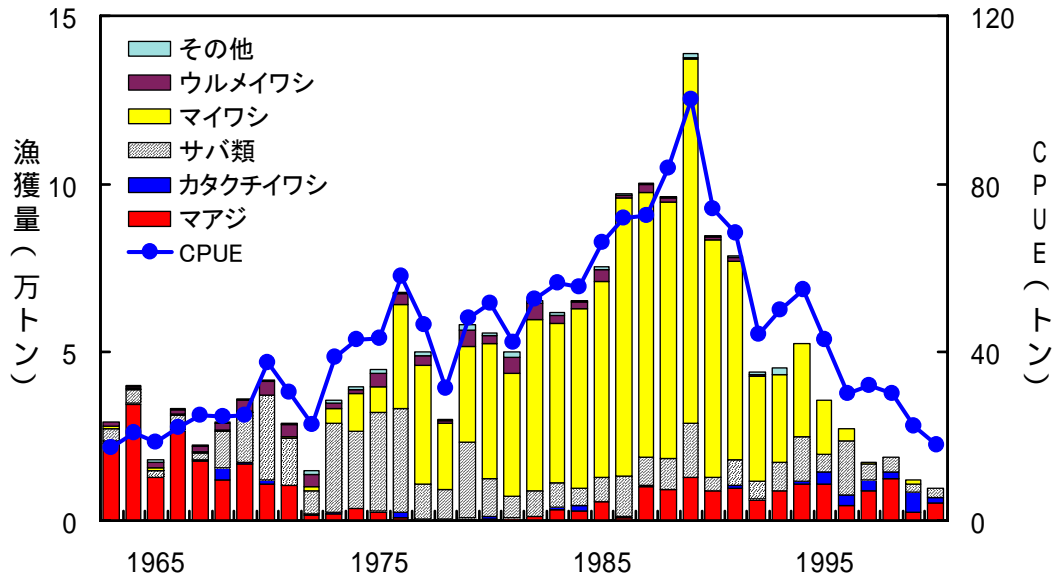


図 1 浜田漁協所属の中型まき網船による魚種別漁獲量と CPUE の推移

量は 1989 年をピークに減少傾向で、その主な要因としてはマイワシ資源の減少、マアジ・マサバ等マイワシに替わる魚種の漁獲の伸び悩みがあげられる。1999 年は前年不漁だったマアジがやや持ち直したものの、カタクチイワシが減少した。

(2) 魚種別漁獲状況

図 2～6 に中型まき網によるマアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの漁獲量の平年値（過去 5 ヶ年平均）、前年及び今年の季節変化を示す。

マアジ

図 2 に浜田港の中型まき網漁業によるマアジ漁獲量の季節変化を示す。

2000 年の総漁獲量は 5,015 トンで平年の 65%、前年の 208% となり、平年を下回ったものの、前年の約 2 倍の漁獲であった。平年に比べ春から夏にかけてのピークは見られなかったが、11 月、12 月は平年を上回る漁となった。4 月～8 月は尾叉長 16～18cm 程度の 1 歳魚（1999 年級）が、

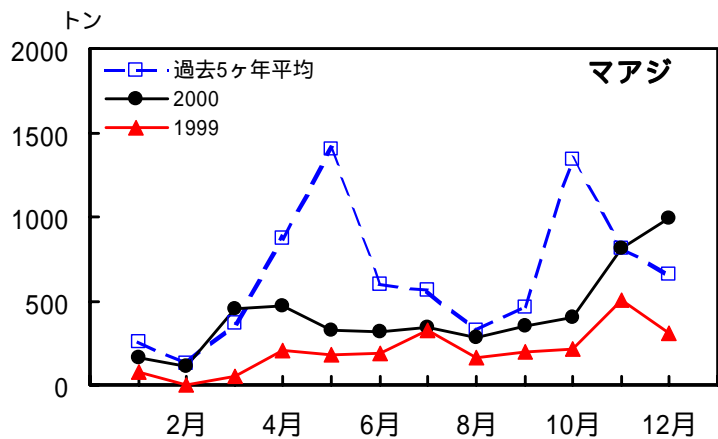


図 2 浜田の中型まき網によるマアジ漁獲量

9月以降は9~15cmの0歳魚(2000年級)が中心であった。

前年の秋に0歳魚(1999年級)が不調であったことから、春~初夏にかけての漁に影響したと考えられる。また、9月以降の0歳魚(2000年級)の発生量が好調であるが、東シナ海から日本海南西部にかけての海域でのマアジ0歳魚の漁獲パターンは、長崎県から鹿児島県にかけての沿岸域および、島根県西部海域では好調であったが、島根県東部以東、山口県から佐賀県沿岸域および、東シナ海沖合域では低調に推移した。

マサバ

図3に浜田港の中型まき網漁業によるマサバ漁獲量の季節変化を示す。

2000年の総漁獲量は2,578トンで平年の39%、前年の115%となり、平年を下回ったが、前年を上回った。漁獲の主体は尾叉長25cm前後の豆サバ(0~1歳魚)で、2歳魚以上の高齢魚の漁獲は少なかった。2月、3月にややピークが見られたが、秋のピークは見られず、年間を通して低調に推移した。

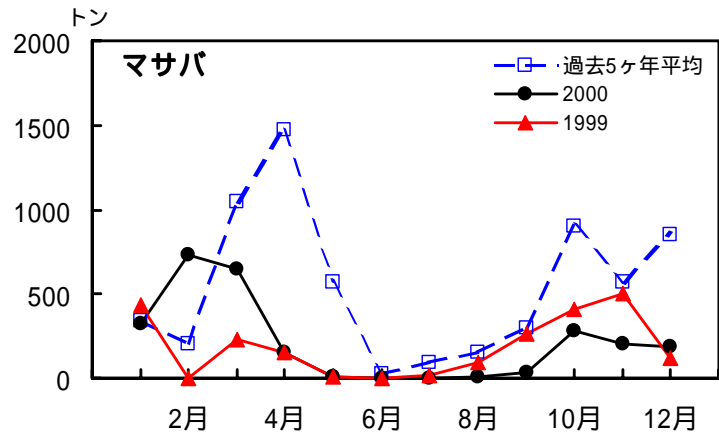


図3 浜田の中型まき網によるマサバ漁獲量

マイワシ

図4に浜田港の中型まき網漁業によるマイワシ漁獲量の季節変化を示す。

2000年の総漁獲量は51トンで平年の1%、前年の4%で平年・前年を大きく下回った。県東部ではやや漁獲があったものの、浜田ではマイワシの姿をほとんど見ることは無かった。全国的なマイワシの漁獲状況は、太平洋でややまとまった漁獲が見られることもあるが、日本海側ではほとんど漁獲されない。マイワシ資源は依然として低水準状態である。

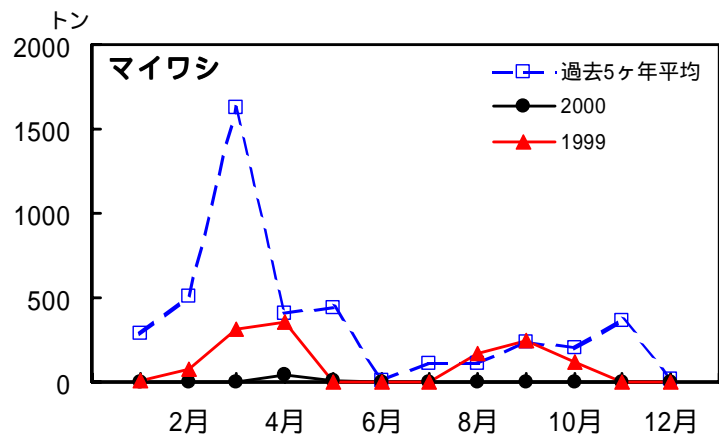


図4 浜田の中型まき網によるマイワシ漁獲量

カタクチイワシ

図5に浜田港の中型まき網漁業によるカタクチイワシ漁獲量の季節変化を示す。

カタクチイワシの漁獲量は1995年以降冬期を中心として、3,000トンから3,500トン程度の漁獲があり、漁獲量が減少しているマイワシに替わって漁獲されている主要魚種の一つである。

2000年の漁獲量は1,961トンとなり、平年の54%、前年の32%と低調に推移

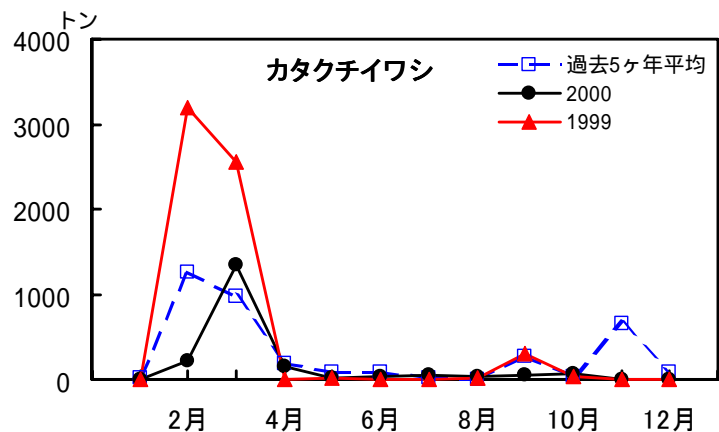


図5 浜田の中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

した。漁獲の季節変化を見ると、3月に漁獲のピークが見られたが、例年見られる2月のピークが見られず、春漁が不調であったため漁獲量は大きく落ち込んだ。夏以降の0歳魚の発生量が少ないことから、来春の漁も低調に推移する可能性がある。

ウルメイワシ

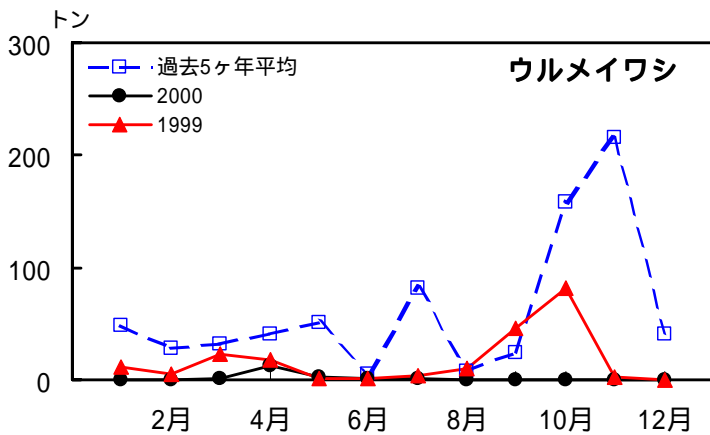


図6 浜田の中型まき網によるウルメイワシ漁獲量

図6に浜田港のまき網漁業によるウルメイワシ漁獲量の季節変化を示す。

2000年の漁獲量は18トンで平年の3%、前年の9%と極めて低調に推移した。ウルメイワシの主漁場である九州西岸海域でも漁獲は平年・前年を下回っており、対馬暖流域全体で減少傾向にあると判断される。資源の変動傾向、生態的知見が十分でないため今後の予測が難しいが、マイワシのように幻の魚になってしまう危険性がある。

2. 釣り漁業

(1) スルメイカ

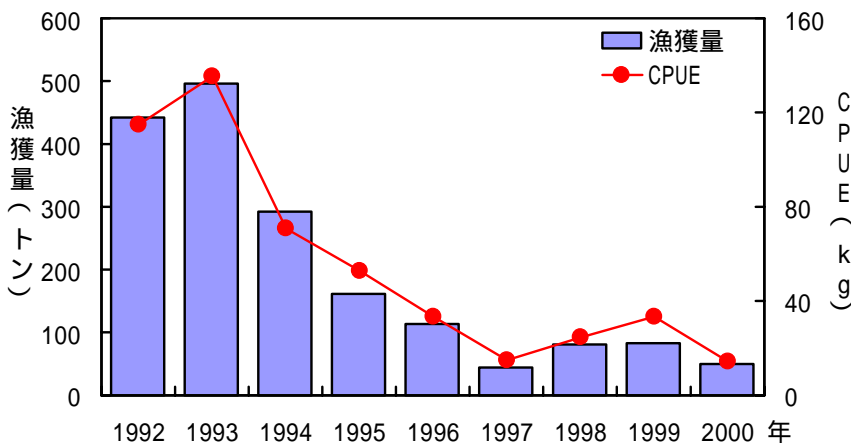


図7 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲量およびCPUE

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるスルメイカの漁獲動向を図7~9に示す。2000年の漁獲量は49トンで、前年(83トン)の59%、平年(過去8カ年平均)の23%と低調に推移した。CPUE(1隻1航海あたり漁獲量)は14.1kgで、前年(33.5kg)の42%、平年(60.4kg)の23%

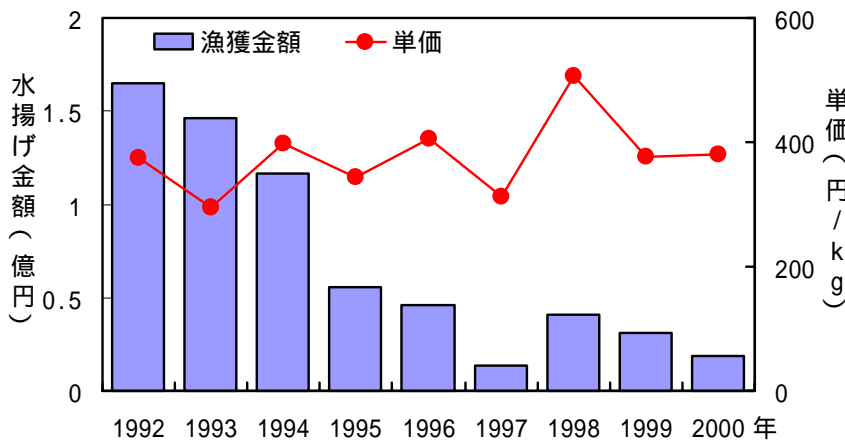


図8 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲金額および単価

と前年・平年を大きく下回った。漁獲金額は1,868万円で、前年(3,131万円)の60%、平年(7,691万円)の24%と低調に推移した。単価は381円/kgで、前年(376円/kg)の101%、平年(378円/kg)の101%とほぼ前年・平年並みで推移した。単価は若干の変動はあるもののほぼ400円/kg前後で推移している。近

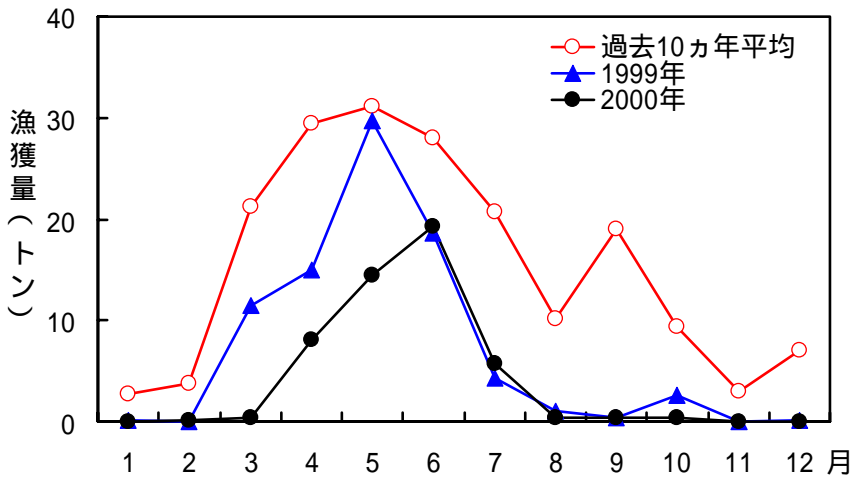


図9 浜田地元小型船によるスルメイカの月別漁獲量

年、スルメイカの漁獲量、漁獲金額ともに1992年をピークとして減少傾向にあり、近年では低水準で横ばいに推移している。月別の漁獲状況を見ると、2000年は4~6月にややまとまった漁獲が見られたが、その他の月は平年を大きく下回り、8月以降は、ほとんど漁獲がない状況が続いた。近年、日本海のスルメイカ資源は高水準である

が、日本海西部沿岸海域への来遊状況が悪く、沖合域で操業する大型船は比較的漁があるが、沿岸域で操業する5トン未満船は漁がないという状況が続いている。また、小型船は夏から秋にかけてのケンサキイカ漁に漁獲対象が移ってきており、小型船のスルメイカ漁の衰退に拍車をかけていると思われる。

(2) ケンサキイカ

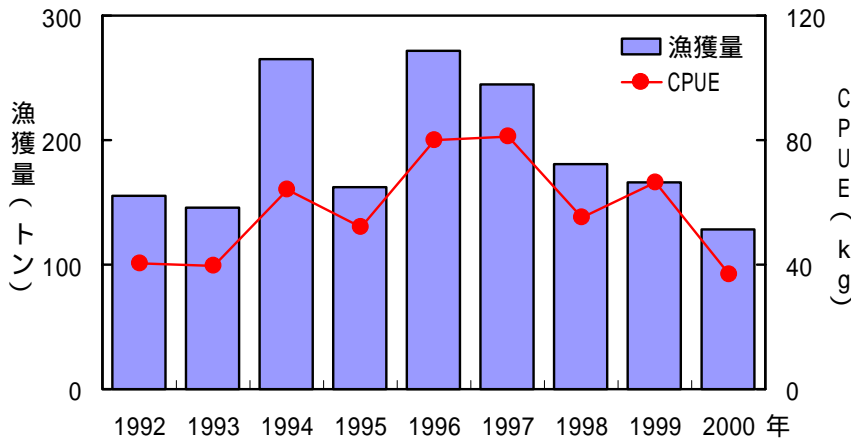


図10 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲量およびCPUE

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるケンサキイカの漁獲動向を図10~12に示す。2000年の漁獲量は129トンと、前年(166トン)の78%、平年(200トン)の64%と低調に推移した。CPUEは37.0kgで、前年(66.5kg)の56%、平年(60.4kg)の61%と前年および平年を大きく下回った。漁獲金額は1億4,152万円で、前年(1億5,897万円)の89%、平年(1億9,829万円)の71%とやや低調に推移した。また、単価は1,101円/kgで、前年(959円/kg)の115%、平年(1,026円/kg)の107%とほぼ平年並みで推移した。

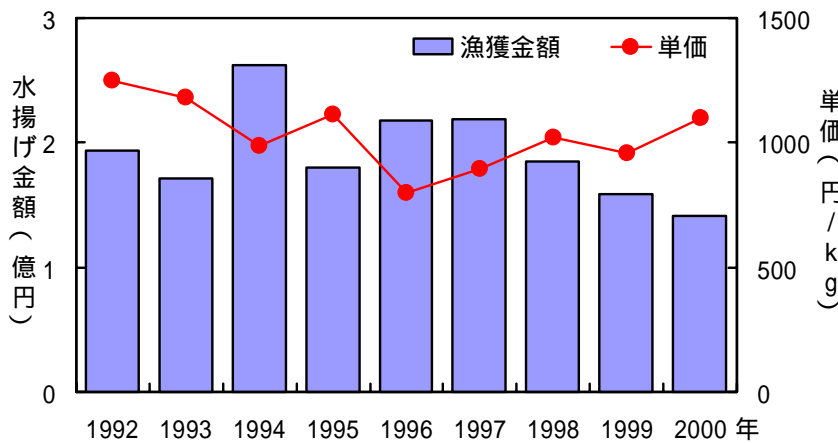
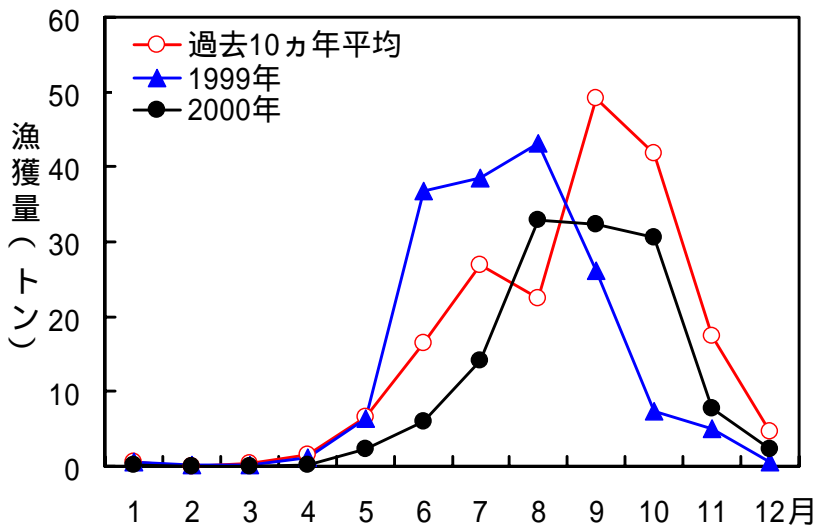


図11 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲金額および単価

ケンサキイカの漁獲量は明瞭な傾向は見られないが、1996年以降減少傾向にあり、



今後の動向が注目される。また、月別の漁獲量を見ると、2000年は8～10月にかけて漁獲のピークが見られ、ほぼ平年と同じような漁獲パターンであったが、昨年(6～8月)に比べ約2ヶ月程度漁獲のピークが遅くなっている。

図12 浜田地元小型船によるケンサキカの月別漁獲量

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以東の対馬周辺から日本海西部を漁場としており、8月16日から翌年5月31日まで操業を行なう(なお、6月1日から8月15日までは禁漁期間)。ここでは統計処理上漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

(1) 全体の漁獲動向

図13に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業(以下、浜田沖底という)における総漁獲量と1統当たり漁獲量(以下、「CPUE」という)の経年変化を示す。

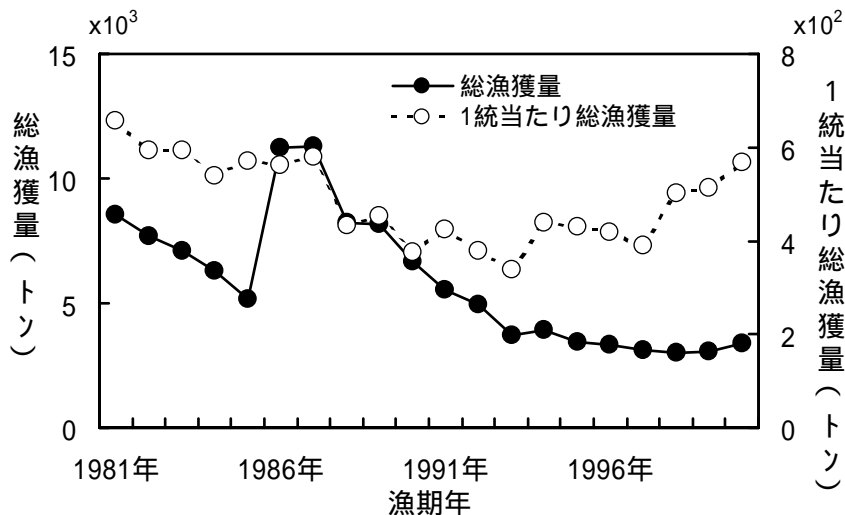


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業の総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

総漁獲量は、1993年以降、横這い傾向にあり、3,000トン台で推移している。一方、CPUEは近年増加傾向を示し、500トン台で推移している。

2000年漁期は6ヶ統が操業し、総漁獲量は3,404トン、CPUEは前年を11%、平年(1981年～1999年平均)を20%上回る567トンで、1987年漁期以来久しぶりに550トン台を超える水揚げがあった。また、総水揚げ金額は16億1,661万円、CPUEは2億6,944万円で前年を5%、平年を29%上回り、1981年以降最高の水揚げとなった。

図14にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

(2) 主要魚種の漁獲動向

カレイ類

図14にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

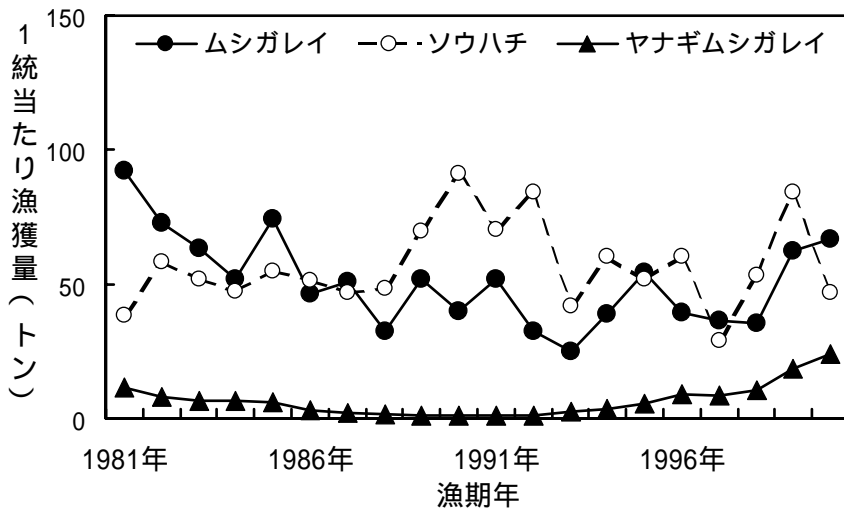


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の 1 統当たり漁獲量の経年変化

傾向にある。2000 年の漁獲量は 280 トン、CPUE は 47 トンで、前年を 45%、平年を 20% 下回った。

ヤナギムシガレイの CPUE は 1981 年以降減少傾向にあり、1990 年には 0.8 トンまで落ち込んだ。その後、緩やかな増加傾向を示し、1998 年には 10 トン/統を超えるまでに回復した。2000 年の漁獲量は前年を 30% 上回る 143 トン、CPUE は 24 トンで平年の 4.5 倍の水揚げがあり、1981 年以降最高の水揚げがあった。

ムシガレイの CPUE は 1981 年から 1988 年にかけて減少傾向にあったが、その後、周期的な変動を繰り返しながら近年は増加傾向にある。2000 年の漁獲量は 400 トン、CPUE は平年を 40% 上回る 67 トンであった。

ソウハチの CPUE は 1982 年から 1988 年にかけて 50 トン前後で安定的に推移していた。1990 年にかけて一時的な増加が見られ、その後、増減を繰り返しながら減少

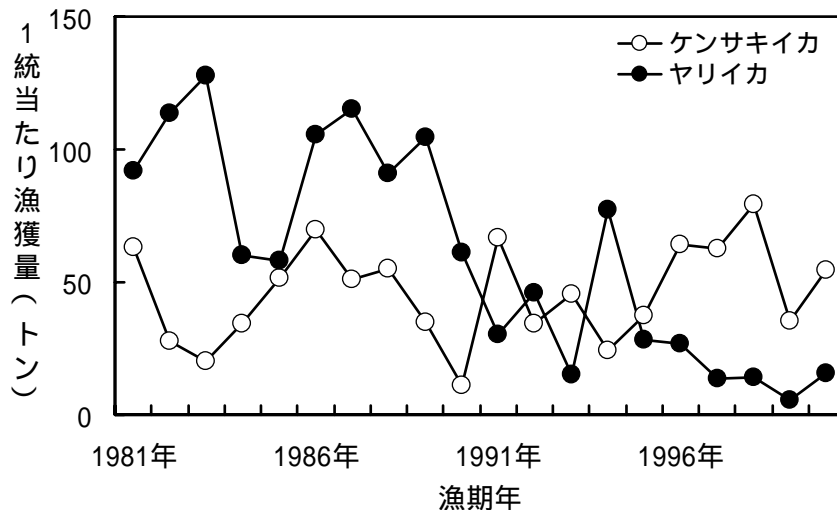


図 15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の 1 統当たり漁獲量の経年変化

であった。また CPUE は 16 トンで前年の 2.9 倍、平年の 26% 増の水揚げ状況であった。

その他

図 16 に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種における CPUE の経年変化を示す。

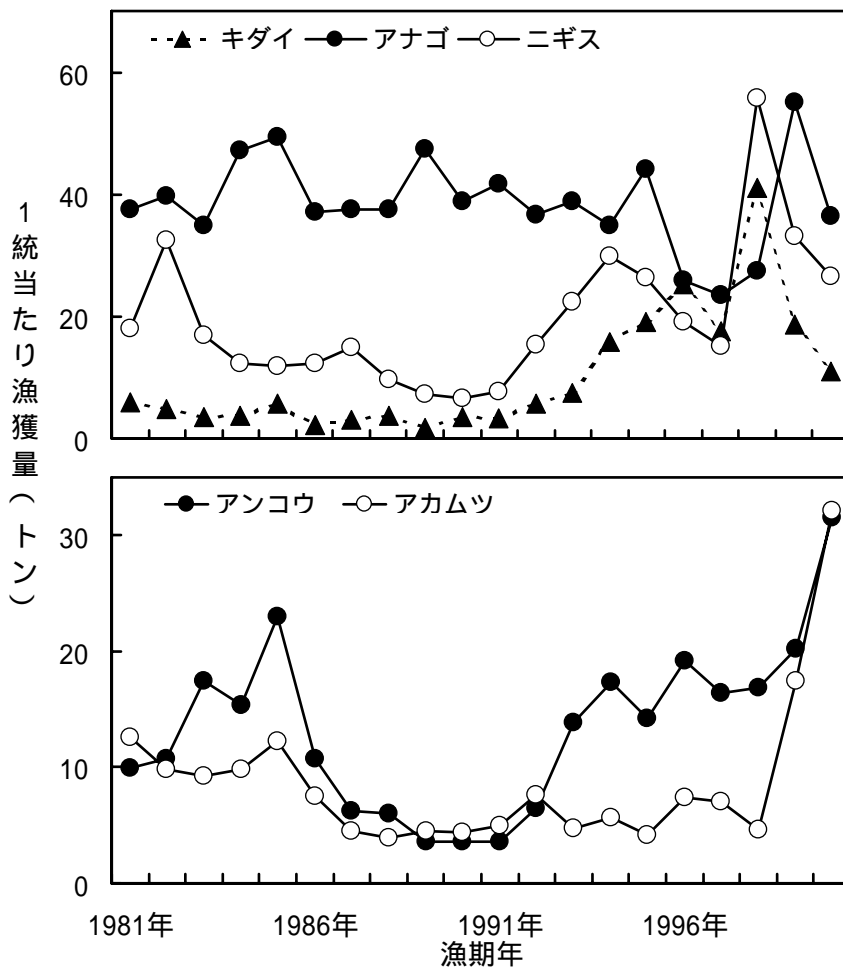
イカ類

図 15 にイカ類の CPUE の経年変化を示す。

ケンサキイカの CPUE は数年周期で増減が見られ、近年は減少傾向にある。2000 年の漁獲量は 327 トンで前年を上回ったが、平年の 6 割に留まった。CPUE は 55 トンで前年を 55%、平年を 22% 上回った。

一方、資源的に低水準状態にあるヤリイカの CPUE は増減が見られるものの、近年は低位横這い傾向にある。2000 年の漁獲量は 94 トン

アナゴの CPUE は 1996 年に急減した後、25 トン前後で推移していたが、近年回復の兆しが見られる。2000 年の漁獲量は 219 トン、CPUE は 36 トンで前年および平年を下回った。



キダイの CPUE は 1988 年を境に減少傾向にある。

2000 年の漁獲量は 66 トン、CPUE は 11 トンで前年を 40% 下回ったが、平年をわずかに上回った。

ニギスの CPUE はキダイの変動と近年類似しており、1988 年を境に減少傾向にある。2000 年の漁獲量は 160 トン、CPUE は 27 トンで前年を 20% 下回ったが、平年を 37% 上回った。

アンコウの CPUE は 1990 年代に入り 16 トン前後で推移していたが、近年増加傾向にある。2000 年の漁獲量は前年を 57% 上回る 190 トン、CPUE は平年の 2.5 倍の 32 トンで、1981 年以降最高の水揚げとなった。

アカムツの CPUE は 1986 年から 1998 年にかけて 6 t

図 16 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種 1 統当たり漁獲量の経年変化

前後で横這い傾向を示していたが、近年増加傾向にある。2000 年の漁獲量は 192 トン、CPUE は 32 トンで前年の 1.8 倍、平年の 4.5 倍の水揚げとなった。特に 2000 年冬季以降、全長 16~18cm (1998 年級群) の小型魚が漁獲主体であることから、この年級群の発生および生残状況が良好であったと考えられる。

4. 小型底びき網漁業第 1 種

本漁業は山口県との県境北西沖から隠岐海峡にかけての水深 80~180m の海域を漁場とし、現在 63 隻が操業を行なっている。操業期間は 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までである (6 月 1 日から 8 月 31 日までは禁漁期間)。ここでは統計処理上、漁期年を用い、1 漁期を 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までとした。なお、県全体の操業隻数は 63 隻であるが、ここでは温泉津漁協所属船を除く 62 隻分の集計値を用いた。

(1) 全体の漁獲動向

図 17 に 1993 年以降の小型底びき網漁業 (以下、小底という) における 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

漁獲量は、1995 年以降、横這い傾向にあり、85 トン前後で推移している。一方、水揚げ金額は

近年減少傾向にあり、近年 4,000 万円台を割り込んでいる。

2000 年の小底全体の総漁獲量は 5,094 トン、総水揚げ金額は 23 億 5,568 万円であった。また 1 隻当たり漁獲量は 82 トン、水揚げ金額は 3,799 万円で、量・金額とも前年（1～2%）および平年（6～7%）を下回った。

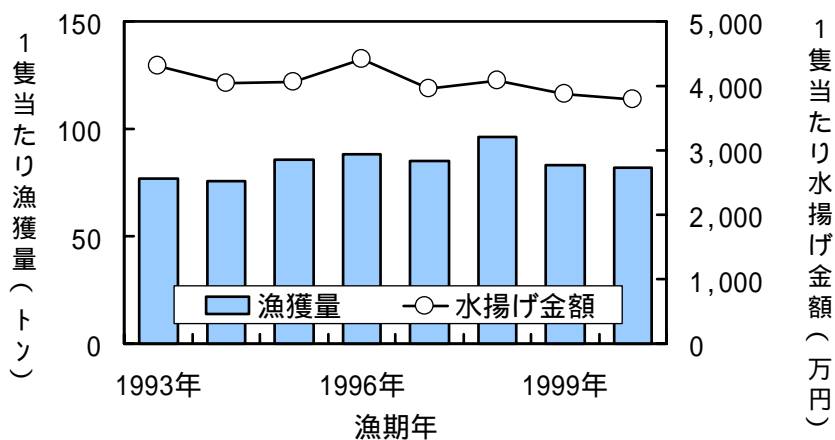


図 17 小型底びき網漁業の 1 隻当たり漁獲量と揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向

カレイ類

図 18 にカレイ類の 1 隻当たり漁獲量（以下、CPUE という）の経年変化を示す。

ムシガレイの CPUE は 1995 年を境に減少傾向にある。2000 年の漁獲量は 259 トン、CPUE は平年を 34% 下回る 4.2 トンであった。

近年急激に漁獲が増加したソウハチの漁獲量は 918 トン、CPUE は 14.8 トンで、好漁であった 1998 年、1999 年を大きく下回り、前年の 6 割に留まった。

メイタガレイの漁獲量は 66 トン、CPUE は 1.1 トンで前年を 18% 上回ったが、平年の半分の水揚げしかなかった。

イカ類

図 19 にイカ類の CPUE の経年変化を示す。

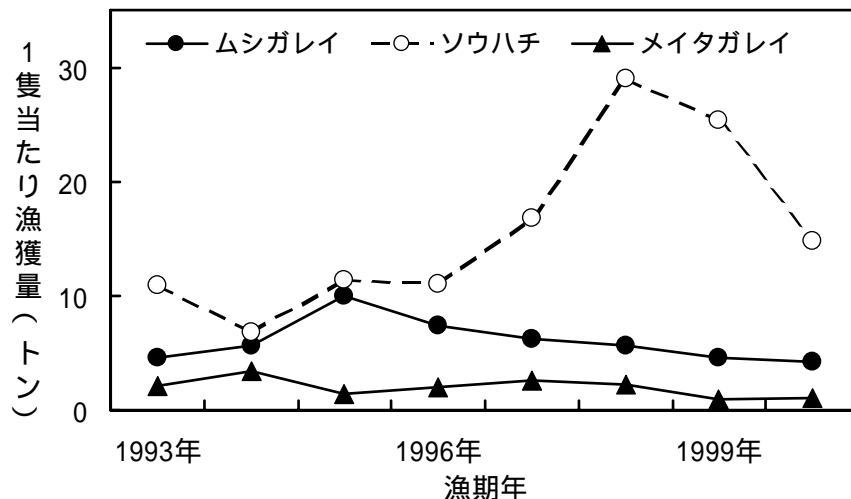


図 18 小型底びき網漁業におけるカレイ類の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

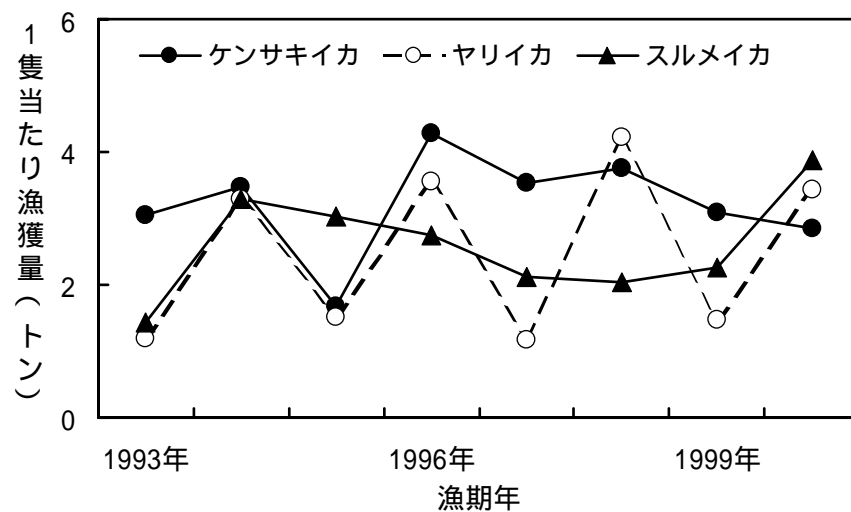


図 19 小型底びき網漁業におけるイカ類の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

ケンサキイカの CPUE は 1996 年を境に減少傾向にある。2000 年の漁獲量は 176 トン、CPUE は 2.8 トンで前年を 8%、平年を 13% 下回った。

一方、ヤリイカの CPUE は 1 年おきに好不漁を繰り返している。2000 年の漁獲量は 214 トン、CPUE は 3.4 トンで前年の 2.3 倍、平年の 1.5 倍の水揚げで、1998,1996 年に次ぐ高い値となった。

スルメイカの 2000 年の漁獲量は 241 トン、CPUE は 3.9 トンで前年の 1.7 倍、平年の 1.6 倍で 1993 年以降最高の水揚げとなった。

その他

図 20 に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種における CPUE の経年変化を示す。

ニギスの漁獲量は 475 トン、CPUE は 7.7 トンで前年を上回ったが、平年の 43% 減であった。

1990 年代の資源水準と比べ、1/2 まで減少した。

近年増加傾向にあるアンコウの漁獲量は 446 トン、CPUE は 7.2 トンで、前年を 36%、平年を 60% 上回り、1993 年以降最高の水揚げとなった。

アナゴ類の漁獲量は 219 トン、CPUE は 3.5 トンで前年および平年を上回った。

近年増加傾向にあるアカムツの漁獲量は 207 トン、CPUE は 3.3 トンで前年の 2.1 倍、平年の 2.8 倍の水揚げとなった。秋季に小型魚がまとまって漁獲され、1993 年以降最高の水揚げとなった。

周期的な増減を繰り返すハタハタの漁獲量は小型魚主体に 175 トンの水揚げがあった。また CPUE は 2.8 トンで前年を 17%、平年を 53% 上回る水揚げとなった。

1996 年を境に減少傾向にあるキダイの漁獲量は 200 トン、CPUE は 3.2 トンで前年を 20%、平年を 34% 下回った。

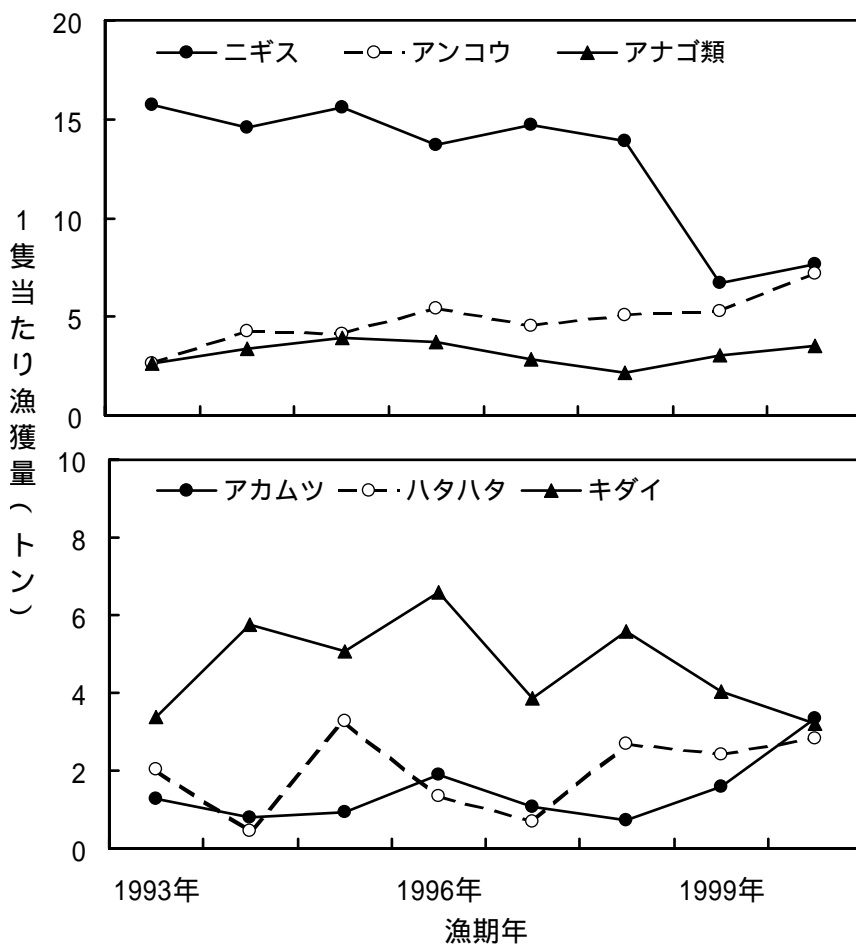


図 20 小型底びき網漁業における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化